



春の叙勲を受章 旭日単光章 中小企業振興功勞

塗装のプロ育成に力 川西 克司 氏 県商10回卒 (昭和36年3月卒)



川西 克司 氏

15歳から家業の鉄板塗装の「川西塗装」で働き、塗装歴は60年。1963年に社長となり、業界トップレベルの技術を持つ企業に育て上げた。主に自動車バンパーの成型や塗装を手掛けている。

40年ほど前、「業界発展のため」と全国の塗装会社の若手を預り、技術を教え始めた。トップ企業が手の内を明かすのは異例。指導料はなく、給料も支払った。

川西さんが教えたのはもっぱら技術だ。「現場が会社の看板。現場の気持ちが分からなければ社長にはなれない」。2、3年かけて塗装のプロに育て、古巣に帰した。

日本工業塗装協同組合連合会会長も2年間務め、指導で全国を飛び回った。現在は川西塗装の会長として現場を後進に任せる。「自分の製品をよく見なあかん」と語る目は、今も力強い。豊橋市下地町

(中日新聞 2018.4.29 朝刊)

わが社の特徴の一つにもらう給与額の「自己申告制」があります。特に中途採用の社員には単純に「いくら欲しい?」と聞きます。中途の社員は前の職場で辛い思いをしている人が多く、新しい職場にかける意気込みは新卒の社員とは比べものにならない並々ならぬものがあります。そんな彼らのヤル気を更に引き出す方法として「自己申告制」を行っているのです。もらった以上に働かなくてはならないことを彼らは分かっています。大手メーカーを退職してきたある社員は最初に申告した給与から五年間一度も上げて欲しいと言って来ませんでした。優秀な社員でしたから「五年間も据え置いて働いているけど、申告しなくていいのか?」と聞くと本人は「給与に見合う仕事をしようと頑張っていますが、まだ認めてもらえていないのかな」と勝手に思っていたようです。そこですぐに自己申告させて昇給させましたら、今度はこちらが心配するほど仕事に打ち込んでしまい途中で「体を休ませろ」と注意したほどです。給与を自分で決めるという事は従業員がそれだけの働きをしようと考えるわけです。

最後にこれからを担う若者達に言っておきたいことがあります。夢を描いてそれを実行することは大変良い事だと思います。しかし、その夢をかなえるためには苦勞を惜しんではいけないと言うことを学んでください。わが社も小さな町工場から始まったのです。父の死後は母らとこれでもかと言うぐらい働きました。がけっして嫌だとは思いませんでした。それは責任をもって仕事をすることに喜びを感じていたからです。自分に責任をもって事を始めれば夢に一步近づいていると考えるべきです。今、わが社があるのは先人たちのたゆまぬ努力と若手たちの活力ある仕事への情熱です。人とのつながりを明日への活力に変えて毎日を生きて行く。そしてなるべく暇な時間を作らないように心掛ける。遊ぶ時間を作るなど言っているわけではありません。遊ぶ時は目いっぱい遊ばばいいのです。集中力を高めるのは仕事ばかりではありませんからね。私もゴルフが好きで月に何度もラウンドしています。ハンディキャップをシングルにするまではと誓ってその夢をかなえました。仕事も遊びも充実させる事が自分の人生をより高い位置に引き上げてくれるでしょう。自分を信じ、人を信頼し、一度だけの人生に妥協をしない生き方を見つけていただきたいと願っています。

「豊商の群像Ⅲ向陵の人々①」より抜粋